

和歌山で起きた青酸カレー事件は卑劣な無差別殺人で許し難い事件です。今まで祭りを楽しんでいた人が突然命を奪われてしまう。二度とこんな事があってはいけません、人生何があるか分かりません。だからこそ今を充実して明るく過ごしたいと思います。

< 第 3 8 回 ほほえみの会 >

新会員 3 人を含み 8 人が集まりました。

熱海から参加された方は「前の週まで元気にプールで遊んでいた息子がまさかこんな難病にかかっていたとは」とショックの様子。一番良い病院へ入院させたいとのことで静岡へ。会社の理解もあり面会には毎日新幹線を通っているそうです。

入院して半年、今までは毎日泣いているばかりだったが最近ようやく気持ちを入れ替えて、会に参加したという方もいました。通常一ヶ月で寛解するのにまだしない。きわめて状況は悪く移植を考えており臍帯血でようやく適合する型が見つかった。しかし神奈川の病院に転院しないと移植が受けられない。さらに体重のわりに臍帯血の量が少なくどうしたらいいか悩むとのこと。

13 歳の一人息子さんとのことで心配はよくわかります。息子さんも初めての入院生活で、病棟には小さい子も多くしっかりしなければいけないということでストレスもたまるでしょう。さらに子どもは親の心配や泣き顔には敏感に反応します。そんなことで親の心配顔が本人の病気を治すパワーを抑えているのではないのでしょうか。いくら心配はあっても日々少しでもいい方に物事を考える。そして「親の笑顔」が一番の薬で、そこから本人の免疫力が高まってくるのではないのでしょうかという話が出ました。

また 4 月に入院してすぐに会に出席しその時はずっと泣いていたという方も来られ、「お母さんが泣いていたら子どもは治らない」と言われた言葉が胸に響いたという体験談も出ました。やはり同じ体験をしている人の言葉はスッと心に入る。病棟で泣いていると周りの子ども達からパワーを受ける感じがした。本当は自分が周りにパワーをあげないといけないと気づき、最近では「絶対子供と一緒に家に帰るんだ」と誓っている。それ以来病院に来る途中でもカセットで音楽を流し、海が見えたらいい景色が見えたと喜んでいいる。少しでも良いところを見つけていく。プラス思考というのはこういうことなんだと実感できるようになったとの事です。

先のお母さんも「私はマイナス思考だった。もっと早く会にきて皆さんの話を聞いていれば、子どもを追いつめないで済んだかもしれない」と語っていました。その表情は晴れやかです。大丈夫です。

前の病院での処置が不完全で転院されてきた方もおられました。今、セカンドオピニオンという一カ所だけでない医師の意見を聞くことが話題となっています。時代に遅れている医師ほどそれを拒否する傾向にあるようですが、思い切って病院を変えて良かったようです。

外泊をさせると感染が心配だし、親も子も気がゆるむ。また病院に戻るのをいやがりそうだが外泊はした方がいいか、しない方がいいかという悩みも出ました。それに対して皆さんからは外泊しても感染率は変わらない。気を許して親に甘えられる。子どもは楽しみにしている。リラックスできていい。という意見が出ました。

次回は 9 月 1 3 日 ( 日 ) 1 2 時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一